

ムギ類赤かび病

1 病原菌の特徴

ムギ類赤かび病は北海道から九州まで、全国各地に発生する病害で、カビが原因で発生します。ムギ類の穂に胞子が作られ、その後、黒色の小粒が生じます。病原菌は罹病したムギの被害穂の他、ムギわら、イネわら、イネやトモロコシの刈り株などで越冬します。越冬した病原菌は翌春、胞子を再形成し、これが飛散してムギ類に感染、発病を起こします。種子伝染・土壌伝染することもあります。

2 被害の様子

- (1) 幼苗、茎、葉、葉鞘等にも発生しますが、穂での発生が最も問題となります。罹病種子は、発芽障害や苗立ち枯れを起こします。
- (2) 穂では、乳熟期ころから穂の一部または全体が褐変し、穎(えい)の合わせ目に桃色～橙色の胞子を生じるのが特徴です。穂軸や穂首が侵されて部分的あるいは穂全体が白穂になることもあります。
- (3) 発生が甚だしいときは、罹病子実は白っぽい屑麦や不稔粒となり、大きな減収は避けられません。

なお、罹病子実を多く含んだものを食用や飼料に用いると、人や家畜に中毒症状を起こすことがあります。このため、食品衛生法でかび毒の基準が定められており、赤かび粒が混入すれば出荷できません。



写真1 コムギの被害穂



写真2 オオムギの被害穂

3 発生について

(1) 発生条件

ア 本病の発生は年次変動が大きく、開花期から乳熟期の気象条件に左右されます。この時期に気温が高く曇雨天が続くと発生が助長されます。

イ 胞子の発芽はムギ穂上では極めて旺盛で、暖かく湿潤な好適条件の場合は短時間で発芽し、その後好適条件が続くとムギに侵入し、発病します。

(2) 発生消長

伝染源となる胞子の飛散は、埼玉県では4月上旬から確認され、4月下旬にピークを迎えます。出穂から2週間が菌の侵入しやすい時期です。穂での発病は出穂後15日頃から見られます。

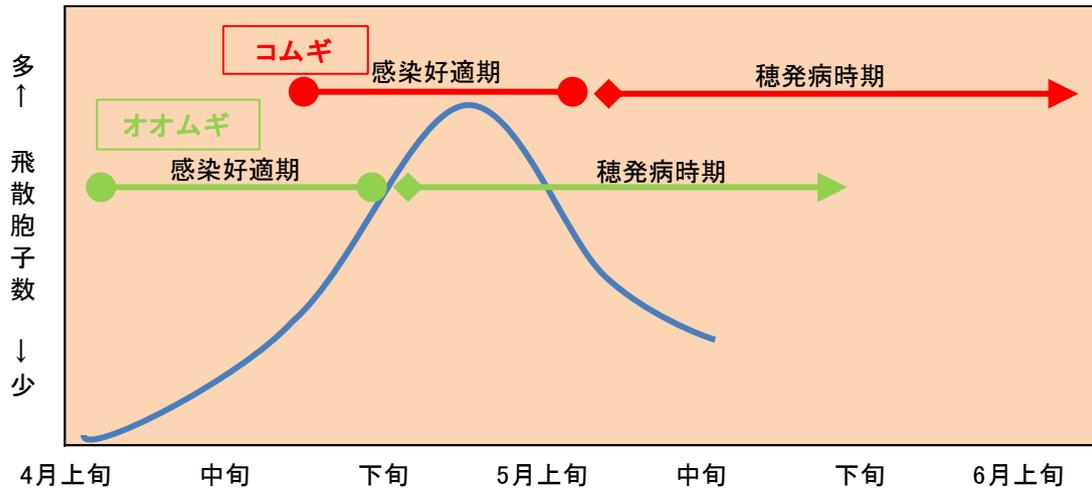


図1 ムギ類赤かび病の胞子飛散量

4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除

ア 現在、県内で栽培されている品種の赤かび病抵抗性は中以下です。特にコムギの「あやひかり」とオオムギの「すずかぜ」では、他品種と比べ、発病しやすいので注意が必要です。

イ 種子は無病圃場から採種します。やむを得ず発病圃場から採種した場合は、塩水選を行い罹病種子を除去します(オオムギ:比重 1.13、コムギ:比重 1.22)。

ウ 窒素肥料の多量追肥を避けます。

(2) 薬剤防除

赤かび粒が混入すると出荷できないので、必ず登録のある薬剤を開花期に散布します。なお、発病前～発病初期の防除効果は高く、それ以降の防除は効果が劣るので早期の散布を心がけます。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県